

個人的な、あまりに個人的な

わが「転向」

なかじまみねお
中嶋嶺雄

(東京外国語大学教授)

えない。全世界に衝撃を与えた「スターリン

批判」は私の大学一年生のときだったので、

日本共産党のいわゆる「六全協」前後の時期の

精神的風土から私自身はまったく自由であっ

たが、やがて砂川基地闘争、警職法反対闘争、

動評闘争など当時の学生運動の社会的高揚の

なかで、六〇年安保の巨大な波瀾が打ち砕け

る直前の時期には、気がついてみると、私も全

学連や都学連の一翼を担うリーダーの一人に

なっていた。中国革命の達成が中国共産党や

毛沢東の存在を現代史の前面に押し出して

いたことも、私を鼓舞していたように思う。

六〇年安保の敗北は、当時の私たちに様々

な影響を与えたが、この敗北を勝利だと思

ついたり、ごまかすのではなく、敗北を敗北

として受けとめようとした私たちは、清水幾

太郎氏を中心にして現代思想研究会を組織

し、いわば反日共(反代々木)の立場から思

想運動を展開した。この運動は永続しな

ったが、そうした運動や組織から各自がばら

ばらになって、それぞれの道を模索し歩きは

じめる過程で、私自身を含む多くの同時代の

体験者が、ある程度の時差をそれぞれに刻みながら、いわゆる「共産主義」から離れていったといえよう。

このあたりをもっと自分自身に即して語ってみたい。

亡き清水幾太郎氏は晩年の著「『社交学」

ノート」(文藝春秋ネスコブックス)のなか

で、私のかつての友人でソ連研究者の故志水

速雄氏に触れたとき、「彼は、わが談話会の

幹事をやってくれた評論家森田実、私が学習

院におりました時に学習院へ招いた香山健

一、のちに東京外国語大学教授になった中嶋

嶺雄等々と同様、或る期間、日本共産党員だ

ったのです」と述べておられる。

森田実、香山健一、志水速雄の諸氏らと私

が並んで語られ、また、右のように、清水先

生から見做されても当然だと思ふ理由は多々

あるのだが、正確には私は日本共産党員だっ

たことが一度もない。一種の文学サロンのよ

うなものだった日本共産党東大細胞の会議

が私のアパートで私も同席して開かれたこと

さえあったのに、私は党員ではなかった。そ

れは、当時、その議会主義、民族主義の日和

見・平和路線を批判するためにも日共を内部

から改革すべきだ、などと殊勝にも考えて私

が入党願いを出したにもかかわらず、日本共

共産主義と私

「転向」という言葉が戦後思想史の文脈のなかで、ある種の罪悪感とともに語られ、論じられた時期があった。そのような論議は、競争責任とか戦後責任といった問題と結びついて、真摯ではあってもどこことなく病理的で薄暗い感じがつきまといつていった。だが、医学や薬学の進歩がかつては不治の病と思われた結核をほぼ撲滅してしまつたように、共産主義を指すと称した「前衛」党への参与やマルクス・レーニン主義への帰依からの離脱が、いつの間にか、清涼感ないしは明朗な感覚のなかでもっとポジティブに位置づけられるようになってきていた。その転機はやはり六〇年安保ではなかつたか、と思う。

その六〇年安保の世代に属する私自身にも、やはりそれなりの思想遍歴がないとはい

産党北地区委員会が私をトロツキストだと見做して、私の入党を拒絶したからであった。たしかに、当時の全学連オルクや都学連執行委員を大学の自治会委員長とともに兼任し、また共産党批判のために中村光男（現千葉大教授、文化人類学）や志水速雄らの諸君と語らって社会学同東外大支部を旗揚げしたりしたのだから、トロツキストだと見做されたのかもしれないが、私自身は全学連主流派を支えたブント（反日共グループとして形成された共産主義者同盟）の正式メンバーでもなかった。

現代思想研究会では機関誌『現代思想』を編集したこともあったが、むしろ構改派知識人との接点も多く、山田宗睦『戦後思想史』に共鳴したり、佐藤昇氏のあの当時の鋭い問題提起や石堂清倫氏の誠実に打たれたりもした。日本共産党を除名された大物、春日庄次郎氏は氏の最晩年まで中国問題や中ソ関係での私の意見を求めて下さった。私が中ソ論争に触発されて毛沢東思想や中国マルクス主義の解剖を試みた最初の著書『現代中国論——イデオロギーと政治的内的考察』（青木書店、一九六四年）は、幸いにして今日でも版を重ねているが、どちらかといえばグラムシやトリアッティらのイタリア・マルクス主義の影響が

響が映し出ている著作だといえなくもない。

そのような私がマルクス主義や「共産主義」から完全に離れたのは、一九六六年秋に文化大革命下の中国を訪問してからであり、より決定的には一九六八年秋から始まった大学紛争での諸体験であった。大学紛争の初期には、まだ若干の党派性が私自身にも残っていたように思うが、やがて「造反有理」のスロガンがキャンパスを埋めつくす頃には、私は完全に「共産主義」の対岸に立っていた。しかし、私の二十歳代から三十歳代初めにかけての右のような様々な原体験こそ、私自身中国研究や今日の世界観の形成に実に豊富な得がたいヒントや栄養を与えてくれたるように思う。

だから、ベトナム革命勝利後十年の段階で私は、躊躇なく、次のように書いて私の文章を結ぶことができた。

「こうして十九世紀の思想としてのマルクス主義は、二十世紀から二十一世紀にかけて、ヨーロッパからロシアへそして中国へ東南アジアへといまひとつの転回をするのかもしれない。今度はマルクス主義からの離脱、すなわち『脱社会主義』という逆転したかたちをとって」（『解放』神話が残した負の遺産）『朝日ジャーナル』一九八五年五月三十日号）

ハメットの謎

ほんまちえこ
本間千枝子
(エッセイスト)

数年前ウォーレン・ビーティが監督、主演した映画『レッズ』を見ていて、「インターナショナル」のメロディが流れ出すと、とめどなく涙が溢れたことがあった。「レッズ」は、ロシア革命勃発時に偶然ロシアに居合わせて歴史の証人となったアメリカ人ジャーナリスト、ジョン・リードの物語である。ジョン・リードの書いた『世界を震撼させた十日間』は昭和二十年代後半に日本で翻訳され、私はこの本を、アメリカから赤狩りに追われて帰国したばかりの画家石垣栄太郎にすすめられて読んだ。

当時から三十年代にかけて青春時代を送った私の胸の内には、今ふり返ってみれば、ある素朴でひたむきな想いがあり、それはこの世に飢える者があってはならないとか、不平等があってはならないという社会正義の実現を望む想いであった。私はそれを時代の常識とさえ信じていた。しかしこの時代は左右両陣営の対立が激しく、そうした素朴な想いも